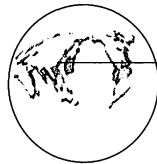


海外動向

フランスの大学院と学生 (1)



斎藤之男*
Yukio Saito

「もし、われわれの製造方法について高い品質に注意を払ったらフランスに対抗するために他国は、いろいろ混乱させてくるが、金はロボームに入る」
(1664年8月3日、コルベール)

ルイ14世の有能な政治家の言葉である。コルベールは重商主義政策を推し進め、ルイ14世の財務総監として財政改革を断行し産業を奨励するとともに、西インド会社を創設したり、その後、フランスの黄金時代を築く。日本はまだ、江戸幕府ができ、4代将軍徳川家綱の時代である。

製造方法を品質として見たてたコルベールは、具体的にどのような手法を指示したか定かでないが、絵画・彫刻を始め、武器などの飛躍的発展がルネッサンスとして栄えたことから伺える。製造技術に関しては、当時、時計技術の創造期に当たる。(フランスにおける時計技術の発展に関しては、次の機会に述べるとして)第1回目は、これらのベースとなる人材教育について述べてみたい。

大手企業が海外の学生に目を向け、日本の学生同様に採用する方向は、海外の学生の質、いわゆる日本での学力、取得科目などに対する評価が、ここ2～3年関心が高まってきた。

取得科目でいえば、日本と海外での科目に差があるように見える。しかし、日本と海外との科目の差は少ないと思う。何が違うのか、海外の学生の質と日本の学生の違いはどこにあるのか、これらの差を

フランスと比較することが、今回の海外動向である。

1. フランスの学年との違い

図1はフランスの高等学校までの年齢と修学時期を示している。

最近、フランスの小学校の事業時間にゆとり教育を設ける話が新聞に載ったが、日本のゆとり教育と違い元々水曜日と土曜日が休みであり、その分、他の曜日に集中した授業時間(6時限目までの授業)であり、総合時間は5000時間である。(日本は3900時間) 教育改革は水曜日を通常の授業に変

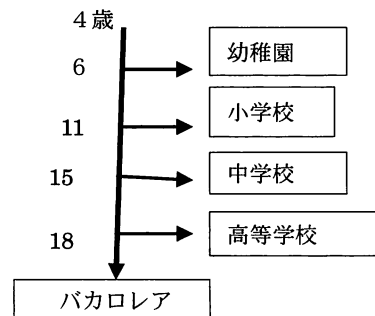


図1 フランスのバカロレア

* 芝浦工業大学